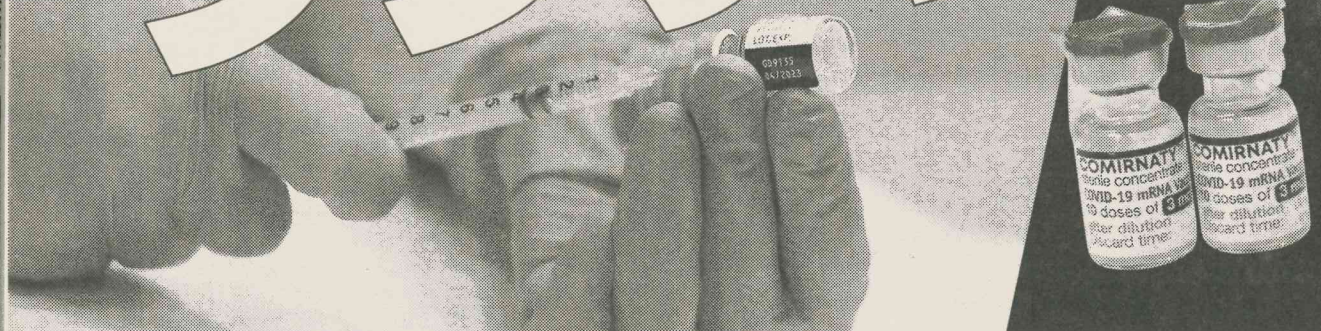


昨年渋谷で行われた反ワクチンデモ

# ワクチンの



# 嘘と真実

- ▶ 年代別 接種後死者で見える「打つべきか」
- ▶ ワクチン後遺症「7割が女性」と語る医師
- ▶ ビッグデータでわかった効果が高い打ち方
- ▶ 高齢者のコロナ死因に変化 やるべき対策は

に、昨年九月から接種が始まりました。このワクチンの接種率は、一月十七日時点で三八・八％。六十五歳以上の高齢者でも六五・八％です。ワクチンを二回打った人は国民の八〇・四％に上るので、三回目以降の接種に対して「打ち控え」の動きが広がっているのが分かります」（厚労省担当記者）

鹿児島大学大学院教授で日本感染症学会ワクチン委員会委員長の西順一郎氏は理由をこう分析する。

「副反応のキツさが一因ではないでしょうか」

副反応は、高齢者よりも若者のほうが顕著だとされる。若者のほうが、異物が体内に混入したときの反応が鋭いためだ。だが、若者だけの問題とも言い切れない。ノンフィクション作家の奥野修司氏（74）は、ファイザー製のワクチンを二回目に接種した後、こんな経験をしたという。

「二十日間ほど動けない状態が続き、寝たきりになってしまったのです。一カ月くらい経ってようやく動ける

オミクロン対応の二価ワクチン

岸田首相は昨年11月に5回目を接種 政府分科会の尾身茂会長も追加接種

「コロナ死者、最多503人 初の500人強」  
こんな見出しが毎日新聞に躍ったのは、日本で初の感染者が確認されてからちょうど三年の節目、一月十五日のことだった。同日付の国内の累積死者数は約六万二千人。一日あたりの死者数は昨年十二月から過去最多を更新し続けており、前日にはついに五百人を突破したばかり。その九割超が六十歳以上だという。

流行初期、コロナとの闘いにおいて切り札になると期待されたのがワクチンだった。二年二月に国内でワクチン接種が開始されてから約二年。いまでも政府は積極的な接種を呼びかけ、昨年十一月には岸田文雄首相自らが五回目の接種の様子を撮影させてアピール。加藤勝信厚労相も「積極的な接種の検討を」との発信を続けている。

発生から三年後の今も、コロナは収まるどころか一日の死者が過去最多を更新。ワクチンを巡っても議論が二分されている。さらに震源地の中国ではゼロコロナ政策から突然の大転換。最新データと取材でその背景を検証する。

「一方で、ネットを中心に「ワクチン危険論」も沸騰、反ワクチンデモの動きも世界各国で後を絶たない。その理由を大別すれば、「ワクチンの副反応や後遺症が怖い」「そもそも効果があのか疑問」「接種後に亡くなっている人がいる」の三つだろう。

増加の一端をたどる感染者数や死者数を前に、今、ワクチンを打つべきなのか否か。未知のウイルスの流行から三年、これまで蓄積された世界各国や国内のデータや研究論文などに基づき、「ワクチンの嘘と真実」を徹底検証した。

そもそも、目下、国内での接種率はどうなっているのか。

「現在、接種が推奨されているのは、オミクロン株に対応した『二価ワクチン』。従来のワクチンの二回目までの接種を終えた人を対象

るようになりましたが、その間、体重は七キロ減少。筋肉量が減ったことで頸椎ヘルニアにもなりました。倦怠感は接種から二カ月以上にわたって続きました」

副反応だけではなく、ワクチン接種後の心身の不調に悩まされる人がいるのも事実だ。兵庫県尼崎市の「長尾クリニック」には、接種後の後遺症を訴える患者が、これまでに二百人以上来院したという。ワクチン接種に否定的な、名誉院

長の長尾和宏医師は言う。「ワクチンの接種後に発症し、重篤な症状が続く症例を、私は『ワクチン後症候群』と呼んでいます。代表的な症状としては、神経痛や頭痛、認知機能障害、動悸や胸痛、慢性疲労症候群など。来院患者の七割は女性です。二十〜四十代の方が多いのですが、中には八十代など高齢者の方もいらっしゃる。高齢者に多い症状としては、帯状疱疹やリウマチが挙げられます」

## 七十代では二十倍以上……

ワクチン製造元の一社であるファイザーは、FDA（米国食品医薬品局）から認可を受ける際に「ワクチン接種により引き起こされる可能性のある副反応」として千二百九十一の症状を報告している。来院する患者の症状には個人差があるものの、いずれも同報告の症状に当てはまるという。

「副反応、そして後遺症もありうる。そうした「負の側面」の中でも最たるものが、ワクチン接種後の死亡例だ。昨年十二月までに厚労省に報告された、ワクチンの接種後に死亡した事例は千九百十七件に上ります。また今年十二月には、ワクチン接種が原因で死亡した可能性が否定できないとして、厚労省が五人に死亡一時金を支給することを決定。国内でこうした支給が認められたのは計二十二人になりました」（前出・記者）

「死なないために」接種したワクチンが、かえって死

亡リスクを高めることがあるのだろうか。

左頁の表を見てもらいたい。コロナ感染による死亡者数と、ワクチン接種後の死亡者数を比較したものだ。ここでいう接種後の死亡者とは、たとえばアナフィラキシーなら接種後四時間以内に発生した場合、血栓症や心筋炎、心膜炎などは接種後二十八日以内に発生した場合が報告対象だ。

ただここで注意すべきは、ワクチンが直接の原因だとは認められていない点だ。表の中には、少数ではあるが、例えば接種後の自殺なども含まれているほか、「患者の知人からの情報提供」といった詳細不明の事例も含まれる。

また、コロナ前の二〇一九年の厚労省のデータでは、急性心筋梗塞の死亡者が年間約三万一千人、心不全が約八万五千人、心筋症が約三千八百人など心疾患で毎年二十万人ほどが亡くなっている。一日あたりにならせば約五百五十人。ワクチン接種からしばらくたって心筋炎などを発症した

としても、接種との因果関係の立証は困難だ。

さて、表を年代別に比較してみると、興味深い事実がある。二十代を見てみると、ワクチン接種後の死者が四十四人なのに対し、コロナ感染による死者が六十六人と、大差は無い。だが、七十代ではワクチン接種後の死者数は四百四十五人なのに対し、コロナ感染死者数が九千九百七十七人。コロナ感染による方が約二十二倍と、ケタ違いに大きい数字なのだ。さらに、八十代では約三十三倍に跳ね上がる。高齢者が「コロナ感染死」と「ワクチン接種後死」のどちらを恐れるべきか、一目瞭然だろう。

では、「ワクチンを打っても効果が無いのでは」という懸念についてはどうか。ワクチンの効果に関する最新データを見てみよう。

「今月三日、五大医学誌の一つ『ランセット』に投稿された査読前論文では、二価ワクチンの接種がコロナ感染による入院率を八十一%低下させたことが報告され

ています」(公立陶生病院の武藤義和感染症内科主任部長)

この論文は、イスラエルで二価ワクチンの接種対象者である六十五歳以上の約六十二万人を対象に、入院や死亡との関係を調査したもの。このうち、二価ワクチン

### 後遺症への有効性は？

さらに、国内でも同様の調査結果がある。

「今月、神奈川県健康医療局が県のホームページに掲載したデータでも、ワクチンの接種回数が多いほうが死亡率が低下することが示されています」(同前)

この調査は、感染状況を把握・管理するための国のデータベース「ハシス」

- 未接種の人の死亡率は一・四二%
- 三回目接種済み人の死亡率は〇・五五%
- 四回目人は〇・三三%
- 五回目人は〇・二二%

チンの接種者で、コロナ感染で入院した人は六人。対して、未接種者は二百九十七人が入院したという。また、未接種者に比べ、二価ワクチン接種者の死亡率は八六%低下したとも記載されているのだ。

さらに、ワクチンについてコロナ感染後の後遺症を抑える効果がある可能性も報告されている。

「二二年八月に発表された『ランセット』にも掲載された論文では、医学系論文のデータベースでワクチンとコロナ後遺症の関係についての論文を検索し、収集された約二千六百件の研究結果を分析しています。これによれば、七つの研究で後遺症に対するワクチンの有効性が認められています」(ひまわり医院の伊藤大介院長)

後遺症への有効性が認められた論文のうち、とくに効果の高さを示したイスラエルの論文がある。ワクチンを二回接種した人は未接種者に比べ、後遺症の代表

的な症状である疲労を訴える率が六四%低かったという。頭痛は五四%、脱力感は一七%低いとされた。

ワクチンをめぐると「嘘と真実」。結局のところ、今回取材した多くの専門家は口を揃えて、こんな見解を示している。

「高齢者を除けば致死率が極めて低いオミクロン株が流行している現在、基礎疾患のない健康な人は無理に打つ必要はない。ただし、基礎疾患のある人、そして高齢者は打つべきだ」

そのうちの一人、長崎大学医学部の森内浩幸教授が語る。

「従来株よりも致死率は低いが著しく変異したオミクロン株の流行により、ワクチンの感染予防効果はあまり期待できなくなりました。若い人にまで「感染拡大を防ぐために、繰り返しワクチンを打ちましょう」と呼びかける時期は終わってはいませんか」

コロナ感染による死亡者数	ワクチン接種後の死亡者数			
	ファイザー	モデルナ	その他	計
～19歳	11	1	0	12
20～29歳	25	18	1	44
30～39歳	38	16	0	54
40～49歳	56	23	0	79
50～59歳	103	29	0	132
60～69歳	155	28	0	183
70～79歳	412	33	0	445
80～89歳	572	42	0	614
90～99歳	313	17	0	330
100歳～	18	1	0	19
計	1,703	208	1	1,912

※コロナ感染による死亡者数は厚労省公表の「性別・年代別死亡者数」に準拠(1月10日付)。性別・年代不明・非公表等の10,697人は除く。  
※ワクチン接種後の死亡者数は昨年12月16日の厚労省の審議会に報告されたもの。年代不明は除く。

だと語る。「現代日本では、六十代は高齢者と言うにはまだ若く健康な方が多い。コロナが危険なのは七十五歳以上の体力の落ちた人や、基礎疾患のある人です。オミクロン株流行下でのワクチン接種の目的は、感染予防よりも重症化予防。高齢者や基礎疾患のある人が、コロナで悪化しない、死なない」ためにワクチンを打つ必要があるのです」

「ここまで見てきたデータからも、やはり、高齢者から

ワクチン接種を検討する価値がありそうだ。では、どのように、打てば効果が

「英国の健康安全保障庁が毎月発表している、ワクチンに関する報告書がありま

### 細菌性肺炎が増えている

「効果が高そうです」(前出・伊藤氏)

英国ではブースター接種を受けた五十歳以上の国民が約千五百万人おり、そのビッグデータが解析されている。報告書の最新版(一月十二日付)のデータをもとに、ワクチンの打ち方を

- ①モデルナを二回打った後のファイザー接種
- ②モデルナ三回接種
- ③ファイザーを二回打った後のモデルナ接種
- ④ファイザー三回接種

オミクロン株に対する効果の持続性が高い順に並べると、以下ようになる。

「これまでの経験から、コロナはどうかやら年に一、二回は流行のピークがあり、その時期は夏と冬であることが分かっています。ワクチン接種のタイミングについてはどうか。

「デルタ株の流行期は、コ

クチンの効果はずっと続くわけではありませんから、流行にあわせて打つことをお勧めします。今からでも遅くありません」(池袋大谷クリニックの大谷義夫院長)

また国内では、第八波で猛威を振ったオミクロン株の「BA・5」から、変異株「BQ・1」への置き換わりが進んでいる。国立感染症研究所の発表では、一月四日時点でBA・5が全体の四六%に低下し、BQ・1が三三%と拡大傾向にあるのだ。また、米国で広がりがつつある「XBB・1・5」も、既に国内で感染が確認されている。これまでと同じ対応で良いのか。

「XBBは、派生株の中でも最も抗体の反応性が低い。ただ、日本では米国ほど感染拡大しておらず、いままぐ恐れる必要はないでしょう」(前出・西氏)

「コロナで死なないためにできることは、まだある。じつは、コロナ感染による死者について、その死因に変化が見られるのだ。

週刊文春連載「待望の書籍化!!」中村計喜 定価1,000円(税込)

コロナ感染によるウイルス性肺炎で亡くなる方が多かった。そのため、比較的若い層でも、基礎疾患のある方が重症の肺炎を起こすケースがあった。一方、オミクロン株ではウイルス性肺炎での死者が減少する代わりに、基礎疾患の悪化やコロナ感染が引き金となった「細菌性肺炎」で亡くなる高齢者が増えています」(防衛医科大学校病院感染対策室室長の藤倉雄二准教授)

コロナ感染により免疫力が下がることで起こる細菌性肺炎。その一例が「誤嚥性肺炎」だ。口腔内の細菌を、食べ物などと一緒に気管に誤嚥してしまうことで発症する。これを防ぐには、歯磨きなどで常に口の中を清潔に保つことが大事だという。また、こんな予防策もある。

「細菌性肺炎の三割は『肺炎球菌』という細菌で起こります。この肺炎球菌に対するワクチンがあります。報告

してはワクチンがあるため、特に高齢者には接種を勧めます」(前出・西氏)

「良い機会だから早く感染して抗体を作ろう」と。あの時期に感染すれば、クリスマスや正月は普通に過ごせましたからね。結局、一緒に食事した七人全員が陽性になりました。一方、恐怖感からか、クリスマスイブの福建省のライブでは防護服を着たファンも見ました」(同前)

# 中国 集団免疫作戦の大迷惑

## 情報隠蔽も死者170万人、感染9億人に...



習氏は中国産ワクチンを接種

昨春、厳しいロックダウンが課された上海。半年以上が経過したが、コロナはまだ猛威を振るっている。企業は従業員の感染で休業が相次ぎ、病院では患者が急増し、薬局には長蛇の列。「次々と人が亡くなり、骨壺が売り切れてしまったほ

どです」

市内の病院「パークウェイ医療」の医師の友成勝子氏はこう語るのだった。

「昨年十月の党大会で方針が示され、十一月末にゼロコロナ反対のデモ『白紙運動』が起ったこともあり、急激なスピードで実現しました。本来は感染増を抑え込んでいた間に医療体制を整えるべきでしたが、八十歳以上のワクチン接種率は約六五%に留まり、医薬品

の備蓄なども進んでいない。そうした中、唐突に緩和してしまったことで、一気に感染が広がったのです」



ノーマスクで年始を祝う若者たち

情報隠蔽も繰り返された。国家衛生健康委員会は十二月中の感染者数を一日当たり約二千五千人と発表してきた。だがWHOに「過少報告している」と指摘されると一月十三日、北京大学の学者らが一月十一日までの累計感染者数が約九億人にのぼるとする推計値を発表したのだ。中国の人口の六割超。全世界の累計感染者数、約六億六千万人を優に超える数字だ。

## 習近平の「寝そべり政策」

英医療調査会社「エアフイニティ」は死者が昨年十二月から今年四月末までで、百七十万人に達すると推計している。

死者については当初、基礎疾患が主な死因の場合も含めず、ゼロ人と発表することもあった。だがこれもWHOの指摘で、国家衛生健康委員会が十二月八日から一月十二日までに約六万人が亡くなったとしたが、「これはあまりに少なすぎます。九億人の感染者数を元にした米UCLAの研究では、同期間の死者数を九十万人と試算しています」(医療ジャーナリスト)

「死者に加えて数百万人規模の後遺症に苦しむ人が現れる恐れもあります」(同前)

約一万二千人の内、陽性者は六百五十七人に上った。二十人に一人が感染していたことになる」(外信部記者)

北京空港の日本行きカウンターには行列が後には殆ど手に入りませんでした。解熱剤も買えず、代わりに日本の「イブクイック」が人気を博しましたが、アリババなど通販サイトではそれも売り切れしました」

さらに医療体制も逼迫した。前出の友成氏が語る。「勤務するフロアで働く二十人の看護師の内、十九人が陽性で出勤不可能になるなど人手不足が深刻でした。ただ、ロックダウン中は二カ月半出勤できず、オンラインの無料診断を行うのみで給料を貰えなかった。今、医療者は血反吐を吐く思いで働いています。昔に戻りたい人は殆どいません」

「中国では過酷な競争社会

を生き抜くことを諦めた若者を『寝そべり族』と呼びますが、習氏のコロナ対策は「寝そべり政策」と揶揄されています。勝利宣言をした以上、政府はもう何も

「中国では過酷な競争社会を生き抜くことを諦めた若者を『寝そべり族』と呼びますが、習氏のコロナ対策は「寝そべり政策」と揶揄されています。勝利宣言をした以上、政府はもう何も

文春ムック「医者が教える」75歳の壁」まるごと攻略ガイド」好評発売中！ 定価6600円(税込)